

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

2025年 9月 30日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 藤 洋 作 様

所属部局・研究科	人と社会の未来研究院
職 名・学 年	特定研究員
氏 名	嶺本 和沙

助 成 の 種 類	令和7年度 ・ 国際研究集会発表助成		
研 究 集 会 名	第47回欧州視知覚会議 47th European Conference on Visual Perception		
発 表 形 式	☐ 招 待 ・ ☐ 口 頭 ・ ☒ ポスター ・ ☐ その他()		
発 表 題 目	順応前後の顔分類画像の評価 Evaluations of face classification images before and after adaptation		
開 催 場 所	ドイツ・ラインラント＝プファルツ州・マインツ・ ヨハネスグーテンベルグ大学		
渡 航 期 間	2025年 8月 21日 ～ 2025年 8月 30日		
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版1枚程度で作成し、添付して下さい。 「成果の概要」以外に添付する資料 ☒ 無 ☐ 有()		
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	350,000円	
	使用した助成金額	350,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳 (差し支えなければ要した 経費総額をご記入ください)	費 目	金額(円)
		航空運賃	204,390
		宿泊費	91,250
		滞在費	0
		学会参加費	75,545
		その他	0
以上に助成金を充当			
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) この度は貴重な機会をいただき誠に有難うございました。オンライン環境が整ってきたとはいえ、現地で直接研究者の方と議論をすることで得られるものは多いと感じております。ぜひこのような助成事業を、今後も長く続けていただきたく存じます。		

成果の概要／嶺本和沙

1. 研究集会の概要

European Conference on Visual Perception は、ヒトの知覚・視覚に関する研究集会で、1978 年より毎年ヨーロッパで開催され、本年は第 47 回目の開催でした。視知覚系分野では大規模な学会として知られており、ヨーロッパの研究者だけでなく、世界中からヒトの知覚・視覚・認知を専門とする研究者が参加しています。本年は、5 日間にわたり対面のみで開催されました。

2. 発表の概要

私は、「順応前後の顔分類画像の評価（英文：Evaluations of face classification images before and after adaptation）」というタイトルで、ポスター発表をいたしました。本研究は、経験によって私たちの顔の知覚が変化する「順応」という現象をテーマとしています。顔の順応は、表情・人種・魅力度といった様々な顔の情報について頑健に起こることが広く知られていました。しかしながら、顔は画像刺激であり、私たちは顔の心的イメージである「表象」を内的に有すると考えられているにもかかわらず、これまでの研究方法は、参加者の主観的な評定値（例：魅力度）や主観的な判断（例：呈示された顔が喜び表情に見えた割合）が順応前後でどのように変化するかという数値に基づいた推測がされていました。本研究では、近年私たちの内的な視覚イメージを画像化する方法として着目されている「逆相関画像分類法（reverse correlation image classification; RCIC）」を用いて、順応前後の顔の内的表象についても画像で可視化することができることを示しました。さらに、可視化した画像を、RCIC を用いた実験の参加者群とは別の参加者に評価してもらうことで、顔の順応の変化が他者からも観察可能な形で画像化できることを示しました。

3. 成果の概要

ポスター発表では、多くの研究者に立ち寄って議論をしていただき、有意義なご意見を頂くことができました。RCIC や顔画像を使用している研究者とは、実験を計画・実施する際のコツや注意していることなど、論文からは得づらいながらも、研究を進める上で重要な情報を交換することもできました。大規模な国際学会に参加し、多くの最新の研究成果に接することができたことは、研究の立ち位置を再確認するとともに新たなアイデアなどを得る有益な機会となりました。

研究者同士の繋がりを構築することも重要であると考え、議論後に連絡先を交換したり、日本人の方とは近く国内で行われる予定の学会でお会いすることを約束して別れたり、継続的な関係を意識して参加いたしました。本集会で得られた新たな知見や人とのつながりを、今後の研究へと繋げていけるよう尽力いたします。